

柏倉松蔵と日本體育会體操学校の教育に関する研究

中 川 一 彦

A Study on Matsuzo Kashiwakura and the Education of Taisō-gakko Attached to Nippon Taiiku-kai

Kazuhiko NAKAGAWA

Matsuzō Kashiwakura was graduated from Taisō-gakko in 1903 that was attached to Nippon Taiiku-kai. He was widely known as the founder of Kashiwa-gakuen in 1921 and also one of the pioneers of the development of education for the crippled in Japan.

In this study, the author investigated his ideas of education and the education of Taisō-gakko that supported and fostered his concepts in the early part of 1900s through his book and the magazines which were published by Nippon Taiiku-kai.

In consequently, it was obvious that Matsuzō Kashiwakura was influenced by Dr. Motokurō Kawase and his colleagues, and that he arose the question regarding the system of school gymnastics. He was anxious for the necessity of using together with medical gymnastics and educational gymnastics which were based on Swedish gymnastics by P. H. Ling. He also developed the study of medical gymnastics at the department of orthopedics of Tokyo Imperial University and established Kashiwa-gakuen through the experiences of his school life and his teacher's background at normal school.

1 研究目的

1921年、私塾としての柏学園の創立者であり、わが国の肢体不自由児教育の先駆者として知られている柏倉松蔵に関する研究は、蒲原¹²⁾(1966)、宇留野²³⁾(1967)、伊藤¹⁰⁾(1975)、広田³⁾(1977)、そして杉浦²⁰⁾(1978, 1979, 1980)などによりなされているが、それらは皆、柏倉松蔵の生涯と柏学園に関する研究である。

そこで、本研究は、体操教師であった柏倉松蔵が、何故、障害児教育に一生をささげ、肢体不自由児の療育を追い求めるようになったのかを、柏倉松蔵の卒業した日本體育会體操学校の教育と照らしながら明らかにするものである。

2 研究方法

本研究では、柏倉松蔵の生涯と柏学園に関する

先行研究を参考にしながら、柏倉松蔵の唯一の著書「肢体不自由児の治療と家庭及学校」と、日本體育会発行の雑誌『體育』を通し、柏倉松蔵の療育観を培った日本體育会體操学校の教育を探ることに努めた。

3 柏倉松蔵の生い立ち

柏倉松蔵は、1882年4月9日、山形県に、後藤藤吉の次男として生まれ、地元の高等小学校を卒業した。

農業以外の道を模索していた柏倉松蔵は、1901年、講習会受講検定に合格して、山形県上山の宮生小学校の代用教員となったのである。

しかし、柏倉松蔵の懷述^{14,19)}によれば、「学校に勤めてみると、日々何か物足りません。こんなことでいいのか。どうせ教育者として立つなら、何か一つ専門の研究を持ちたい。」という考えが湧い

てきたのだそうである。そして、その頃、日本體育会體操学校で学生を募集していることを知り、「やせたからだで頑健な方ではなく、むしろ蒲柳の質の自分も、体操を専門にすれば身体も強健になるだろう、これに限る。」と考え^{14,p5)}、翌1902年、中学校の先生の勧めもあったので、家族の多少の反対をおしきって上京、同年4月、日本體育会體操学校へ入学したのである。

柏倉松蔵は、1903年3月、第3回卒業生として同校を卒業し、東京市立阪本小学校の教員となったが、1904年6月には、私立立教中学校教諭に転じ、さらに、同年11月には、東京府立第1中学校助教諭となり、1905年3月には、神奈川県立第3中学校助教諭として出向しているのである。

この頃、雑誌『體育』に、後藤松蔵の名を散見することができる。

すなわち、第111号(1903年2月)に、卒業予定者として後藤松蔵の名とその卒業論文題目『日本の青年と体育』が、また、第120号(1903年11月)に、校友として宿所の報告ありしものの一人として、「日本橋区亀島町1の2、太田方、後藤松蔵君」の記事がある。そして、第131号(1904年10月)に、體操学校同窓会の幹事の一人として後藤松蔵の名があり、さらに、第132号(1904年11月)には、體操学校同窓会発起人の一人として名を連ねているのである。

その後、1906年8月、彼は、旧上山藩士族柏倉重方の養子となり、柏倉と改姓し、1908年4月には、岡山県へ出向を命ぜられ、岡山県師範学校教諭に任ぜられ、そして、この出向直後、すなわち、1908年5月、山形女子師範学校卒業で、小学校教師をしていた、同郷の羽嶋とくと、26才で結婚したのであった。(表1)

4 柏倉松蔵の開眼

岡山県師範学校の体操教師として赴任した柏倉松蔵は、小学校に勤める妻とくとともに、子供にめぐまれることもなく約10年間、仕事に打ち込んでいたようである¹²⁾。

しかし、体操講習会、応用心理講習会、体操遊戯研究会、信号法講習会、修身科講習会、体操競技講習会等各種講習会に出るなど勉強熱心な柏倉松蔵³⁾は、「私が心にかかってならなかったのは、どこの学校へ行っても、体操の時間になると、足

や手の不自由な子供がきっと1人や2人はいて、運動場の隅にしょんぼりしていることでした。私は、その不幸な子供たちの淋しい姿が、元気に体操する子供たちと対照して余りにも傷々しく、胸に刻みつけられて忘れられなかったのです。あの身体の不自由な子供たちは、どんな風に生成して社会に出て行くのだろう。そんなことを考えると、私は、あの不幸な子供たちをあのまま放っておけない。何とかしてやらなければならないことが、常に胸の中にあったのでした。」と述べ^{14,p8)}、明治のおわりから大正の初めの頃、「自分も体操教師になってからもう10年になる。しかし、自分の教えてきた体操が果してどれだけの効果をおさめたか^{14,p7)}。」というように、当時の学校体操への疑問をいただき、さらに「考えてみれば、自分が学校で教わってきたまます、何の工夫もなくやってきただけです。これではいけない^{14,p8)}。」という反省へと発展させていったのである。

柏倉松蔵は、このようなことから、身体の不自由な子供達の体操として、医療体操への関心をいただくようになるのであるが、医療体操を詳しく知り得ないうちに、これと似たものとしてマッサージの修得を志し、1914年から1918年にかけて、岡山市内の私立盲啞学校教師・葛山覃から、自宅でこれを学び、1918年11月徳島県で、按摩術甲種試験に合格すると、直ちに、岡山県師範学校を休職し、医療体操と教育体操を併用する考えで、医療体操研究のために上京、同年12月には、東京帝国大学医学部整形外科教室への入局を許されたのであった。

柏倉松蔵を指導した整形外科教室の田代義徳は、1900年、ドイツへ留学し、1904年、帰国すると、リング(P.H.Ling)のスエーデン体操を器具を用いてできるようにしたザンダー(G.Zander)の装置(図1)と、整形外科的マッサージ(現在の理学療法)をわが国に紹介した整形外科教室の初代教授であり、同教授の下で学んだ柏倉松蔵は、勇気を得て、肢体不自由教育に専念するために、同教授を顧問兼監督に、1921年5月、柏学園を開設、1959年11月、同園を閉じるまで、その生涯を同学園とともにあらしめたのである。

5 日本體育会體操学校の教育と柏倉松蔵

柏倉松蔵をして医療体操に、そして、肢体不自

表 1. 柏倉松蔵に関する年表

西暦	元 号	月	年令	事 柄	関 連 事 項
1882	明治15	4	0	山形県上山市細谷の農民・役藤藤吉の次男として出生	
92	25		10	この頃小学校卒業	
93	26				川瀬元九郎渡米
96	29		14	この頃から夜中学校教師につき勉学に努める	
99	32				川瀬元九郎帰国
1900	33				田代義徳ドイツ留学
01	34		19	山形県上山市宮生小学校の代用教員となる	川瀬元九郎スウェーデン体操を紹介す
02	35	4	20	日本體育会體操学校本科入学	
03	36	3	21	日本體育会體操学校本科卒業、東京市立阪本小学校勤務	この頃、日本橋区亀島町1の2太田方に住まう 日本體育会第2回運動会において「不具者の駈け競」演じられる 川瀬元九郎「療病的體操」と表現す
04	37	6	22	私立立教中学校勤務	田代義徳帰国
		11		東京府立第1中学校勤務	
05	38	3	23	神奈川県立第3中学校勤務	
06	39	8	24	旧上山藩士族柏倉重方の養子となり柏倉と改姓	東京帝国大学医学部整形外科教室開設
07	40				日本體育会医療體操部を設置す
08	41	4	26	岡山県師範学校教諭に転ず	
		5		結婚	
14	大正3	9	32	盲啞学校教師からマッサージを学び始める	大正博覧会に日本體育会は医療體操の図並びに器具器械を展示す
18	7	11	36	徳島県で按摩術甲種試験合格	『実験医報』第40号に「医療體操」の言葉有
		12		岡山県教員を退職し上京、東京帝国大学医学部整形外科教室への入局を許さる	
19	8	7	37	東京帝国大学医学部雇となる	
21	10	3	39	『日本学校衛生』第9巻第3号に「医療體操ニ就イテ」を著わす	
		5		東京市小石川区大塚仲町に柏学園開設	
				第4回體育学理講演会において「医療體操に就て」と題し講演す	
22	11	11	40	柏学園杉並村高円寺へ移転	
26	昭和2	4	44	東京帝国大学医学部雇を辞す	
27	3	4	45	柏学園杉並村堀ノ内へ移転	
56	31	6	74	『肢体不自由児の治療と家庭及学校』出版	
59	34	11	77	柏学園閉鎖	
62	37	4	80	腎性高血圧症及びネフローゼ症候群に倒る	
64	39	11	82	逝去	
66	41	7			妻とく逝去

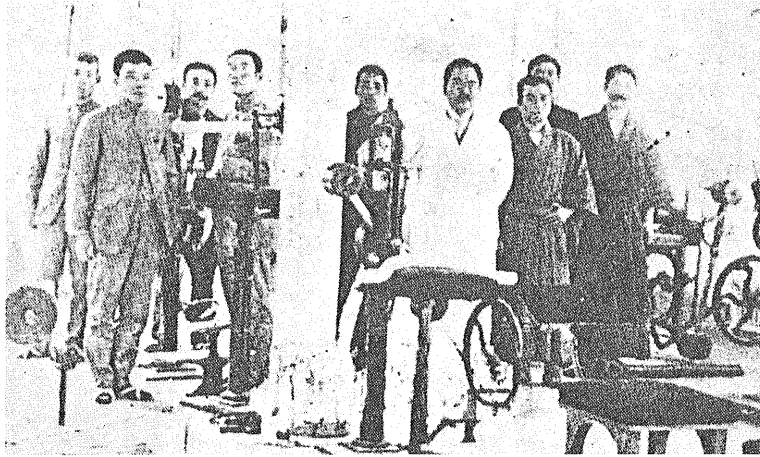


図 1. 田代義徳教授（白衣姿）とザンダーの装置
（整形外科，第 26 巻，第 10 号より）

由教育に関心を向けさせることになった動機として、広田³⁾は、学校体操への疑問、肢体不自由児の存在をあげているのであるが、何故に、柏倉松蔵は、片隅におかれている身体の不自由な子供達への体操として医療体操への関心を抱き、学校体操への疑問を解き明かそうとするようになったのであろうか。

広田がいうように、柏倉松蔵が、勉強熱心だったことはその一因となり得ようが、いくら妻の協力が得られたからとはいえ、「夫婦で教員をしていれば、のんきに暮せるものを何だってそんな物ずきなまねをはじめのだ^{14, p15)}」との沢山の反対を押し切ってまで、柏倉松蔵をこの道に導いたものは、何だったのであろうか。

それは、柏倉松蔵自身が頑健な方ではなく、蒲柳の質だったこと、そして、「体操を専門にすれば自分の身体も強健になるだろう」と考えていた体操に対する考え方ばかりでなく、柏倉松蔵在学当時の日本體育会体操学校における教育から、大いに影響を受けていたのではないかと推察されるのである。

日本體育会体操学校は、1891 年、日高藤吉郎を創立者として設立された民間の日本體育会を母体とし、1893 年併設された体操練習所を基盤に、1900 年名称を改め、文部省管轄の各種学校として、体操教員を養成する目的で開設されたのであ

る。

当時の日本體育会々長は、子爵・加納久宜であり、初代校長は、吉村寅太郎、1902 年からは、高島平三郎であり、教育界からの出身者を軸に、従来の陸軍現役高級将校を軸とした体操練習所とは、その性格を異にするものであったのである。

柏倉松蔵在学当時の教育内容を知る手がかりとして、日本體育会発行の雑誌『體育』をみると、川瀬元九郎や加納久宜、そして堀正短などの体育論があり、殊に、スウェーデン体操の伝承者・川瀬元九郎の影響が、大なるものと考えられるのである。

すなわち、当時、わが国の中心的体操は、スウェーデンの王立中央体操学校の体操、つまりスウェーデン体操が、アメリカを経て移入されたものであったが、その元となったアメリカでは、これより少し前、南北戦争（1861 年-1865 年）のとき、看護婦だった慈善家・Mrs. Mary Hemenway が、アメリカ人にとって、形態の教育が大切であると考え、ヨーロッパへ彼女の代りの人を送り、その助言で、スウェーデン体操を取り入れた normal school of physical education と normal cooking school として Boston Normal School of Gymnastics を 1887 年創設したのである。

そして、1885 年渡米した、スウェーデン王立体操学校の卒業生の一人、B.N. Posse (1862-1895) は、

この学校でスウェーデン体操を指導するとともに、アメリカにおける理学療法 (physical therapy) の発展に貢献したのである。

この頃、すなわち 1893 年⁴¹⁾、アメリカに渡り、1895 年 9 月から 1899 年 6 月までボストン大学医科大学に学び、医師として 1899 年秋帰国した敬虔なクリスチャンである川瀬元九郎は、ポッセ (B. N. Posse) の著『Special Kinesiology of Educational Gymnastics』を持ち帰り、1901 年、雑誌『教育実験界』第 8 巻、第 11 号に、瑞典式体操法として、初めてその内容を示し、翌 1902 年、『瑞典式教育的体操法』(同文館)と『瑞典式体操』(大日本図書)としてその内容をわが国に紹介したのである。

当時、雑誌『體育』(第 113 号、1903 年 4 月)に参助会員として名のある川瀬元九郎は、前年の 10 月から、柏倉松蔵在学当時の体操学校で、生理衛生を教授していたのである。

1903 年 5 月、すなわち、柏倉松蔵の卒業後まもなく発行された『體育』第 114 号にある川瀬元九郎の『体操論』には、「ただに筋骨を運動せしめたりとて体操の目的を達す可きものにあらざ」と、当時の風潮に反省を求め、リングのスウェーデン体操を紹介し、『今体操を分ちて四種とす、即ち、第 1 療病的、第 2 兵式的、第 3 美的、第 4 教育的はれなり。』としているのである。

また、加納久宜は、第 115 号 (1903 年 6 月)において、『體育普及の急務を論ず』と題する論文の中で、「殊に今の学校に於ては校医があつて夫々学校衛生が行はれて居る様ではあるが、足の發育の悪いものや、手の發育の不足のものや、内部に障害のあるものの如きは、総て学校医が診断して居るのであるが、夫れを階級的団体運動として十把一とからげに体操をやっているのではなからうか、是れでは體育と云うよりは寧ろ非體育となりはせぬか。欧羅巴各国に於ては、校医が時々生徒の身体を検し、此の生徒は斯々彼の生徒は云々と診断すれば、学校教員は恰も医者に対する薬剤師の如く、夫れならば此の生徒には、専らこう云ふ運動をせなければならん、彼の生徒には、是れこれの体操を止めさせなければならんとて、夫々医者の診断によって各之に適當したる体操を於こし、中には教科即ち智育を中止して體育のみの為に通学せしむる生徒さへもある由ならば、是こそ

眞に體育を活用している。」と體育のあるべき姿をといたのである。

さらに、堀正短は、第 119 号 (1903 年 10 月)で、『體育教授に必要な医学的知識』と題し、「吾人は現に世の體育教官たるものに向つて医学上の全汎の知識を専門的に具備せよとはいはす。本稿に於いては、唯體育適用病理学とでも名付くべき範圍内のものに就きて其の大體上の知識を備へ置かんことを希望するものなり。若、夫是等に関する知識なき體育教官に苟も健全無病ならざる、即ち身体の何所かに多少の故障あるを免れざる学生を委託せんには、実に其の結果の予測すへからざるものあるを免るる能はざるのみならず、甚しきに至りては、遂に寒心に堪えさる一大危害を将来すへきなり。」として、體育教官は、当然、深く医学上の知識を具有すべきことをといているのである。

それ故、柏倉松蔵は、自身の身体のこともあり、体操学校時代、そして卒業後も、こうした啓蒙主義的教育理念と汎愛主義教育の流れをくむリングのスウェーデン体操を主流とした体操の身体的目標である教育体操と医療体操を中心に学び、その影響を強く受けたものと考えられるのである。

そして、彼のみならず、体操学校の学生が、このような影響を受けていたであろうことは、第 5 回卒業生 (1905 年)の卒業論文論題に、『不健全なる邦人の下肢と其救治策』なるものがあること、さらには、『體育』第 120 号 (1903 年 11 月)にある第 6 期生の児童遊戯法と第 2 回運動会報告にみられる一運動種目としての『不具者の駈け競』の存在を介し、十分に知ることができると考えられるのである。

この『不具者の駈け競』は、第 6 期生が考案し、実施した遊戯法であるが、1903 年 11 月 9 日、現在の日比谷公園において、體育普及を目的とし、皇族はじめ小學校生徒までの参観者の前で公開された体操学校の運動会の種目であり、もちろん、当時、日本橋に住んでいて、卒業まもない柏倉松蔵も、卒業生の一人として参観したであろうと考えられるものである。

この演戲要領をみると、学生を二組に分け、4 ～ 5 間離して向い合わせ、両組とも皆二人宛前後となり、前者は足不自由として 6 尺位の紐の両端を両足部に結び、後者は盲目となり、紐の中央部

を両手で握り、二人一緒に、皆一時に駈けて、両組の中間点にある旗を取り、早く元へ帰った組の順に順位をつけ得点としたものであったが、この遊戯法の主眼は、①不具者に対する同情心を養ふ、②模倣的競争遊戯、③全生を身体不自由を感じしめ益々体育心を喚起せしむ、④触覚と足脚の筋の運動を一致せしむであった。

このような教育環境に育った柏倉松蔵は、『體育』第121号(1903年12月)の醒夢哲人という匿名の投稿論文『體育とは何ぞや』などにも啓発されたのではないかと考えられるのである。

この論文で、著者は、「吾人が生命ある以上は絶体的に體育の要あり。」と述べ、また、体育には、「積極的體育」としての運動、衛生が、「消極的體育」として医学があるとしているのである。そして、「完全な體育」は、この二者の合同が不可欠であり、「両者が分立せずして一人にして両者を兼ねたる完全なる體育専門家の輩出せんを夢想するものなり。よし少なりとせよ、両者の近親を希ふものなり。」と結んでいるのである。

これは、柏倉松蔵が、学校体操への疑問をいだき、医療体操と教育体操を併用する考えで、医療体操研究のため、東京帝国大学医学部整形外科教室へ入局したこととも相通ずるものがあり、仮説ではあるが、この投稿論文の著者は、柏倉松蔵ではないかと考えているのである。

6 まとめ

柏倉松蔵の生涯は、ほぼ明らかにされ^{3,12,23)}、柏学園の意義がみなおされている⁵⁾。

本研究では、肢体不自由児教育に一生をささげたわが国体育界の大先輩・柏倉松蔵の療育観とそれを支え、培った1900年初頭の日本體育会體操学校の教育について、柏倉松蔵の著『肢体不自由の治療と家庭及学校』と日本體育会発行の雑誌『體育』を介し、明らかにしてきた。

その結果、日本體育会體操学校で学んだ柏倉松蔵は、川瀬元九郎らの影響を受け、明治のおわりから大正の初めの頃の学校体操に疑問をいだき、医療体操と教育体操の併用の必要性を希求するようになったものと考えられた。そして、このことが、医療体操の研究、さらには、柏学園の創設へとつながっていったものと考えられた。

もちろん、これらのことは、柏倉松蔵自身、身

体があまり丈夫な方ではなかったという山形時代のこととともに、柏学園創立趣意書の中にみられる彼の言葉^{14,p18)}、「不具者に対する同情の念は一日と深刻になってくるばかりであります。」という柏倉松蔵の個性とあいまって、勉強熱心であり、また、同窓会設立に参加したことにみられるような積極性に支えられたものであったといえるであろう。

欧米諸国では、理学療法へと発展していった医療体操が、近年まで、わが国においては特段の発展をみずにしたことと関連して、医療体操を中心とした体操の身体的目標に重点がおかれず、わが国の学校体操が発展してしまった理由などを別にしても、当時も今も、体育を支えるものは医学であり、体育と医学は、並行して人間にかかわる必要性のあることをも、本研究を通して知ることができた。

(本研究の一部は、第30回日本体育学会並びに第18回日本特殊教育学会において発表した。)

注

注1. 今村嘉雄：日本体育史(不昧堂、1970年)の457頁にある川瀬元九郎の渡米及び帰国に関する記録は、日本聖公会横浜教区所蔵・歴史委員会資料にある川瀬元九郎自筆の履歴書に照らせば、あやまりである。

参 考 文 献

- 1) 学校法人日本体育会：日本体育大学八十年史，日本体育会，1973
- 2) Hermann E. : Physical Education and Physical Therapy, JOHPER, Vol 8, No.3, 349-351 & 359, 1937
- 3) 広田雅子：身障者問題への歴史的一考察，立教大学文学部卒業論文，1977
- 4) 堀正短：體育教授に必要な医学的知識，體育，第119号，17-23，1903
- 5) 細村迪夫：肢体不自由教育，特殊教育，No.23，24-28，1979
- 6) 今村嘉雄：西洋体育史下，明星社，1949
- 7) 今村嘉雄：体育の歴史，大修館，1959
- 8) 今村嘉雄，石井トミ訳：ライス世界体育史，不昧堂，1965
- 9) 今村嘉雄：日本体育史，不昧堂，1970
- 10) 伊藤孝敏：わが国における草創期肢体不自由児事

- 業に関する一考察, 東京教育大学教育学部特殊教育学科卒業論文, 1975
- 11) Jokl E.: The Clinical Physiology of Physical Fitness and Rehabilitation, Charles C. Thomas, 1971
- 12) 蒲原宏: 柏学園と創立者柏倉松蔵・とく夫婦について, 日本医事新報, No2185, 37~38, No2186, 51-54, No2187, 57-58, 1966
- 13) 加納久宜: 體育普及の急務を論ず, 體育, 第115号, 1-9, 1903
- 14) 柏倉松蔵: 肢体不自由児の治療と家庭及び学校, 柏学園, 1956
- 15) 川瀬元九郎: 體操論, 體育, 第114号, 6-15, 1903
- 16) 児玉俊夫他: 日本整形外科の祖, 田代義徳先生, 整形外科, 第26巻, 第10号, 南江堂, 1975
- 17) 中川一彦: 障害児の教育における体育の役割, 学校体育, 第34巻, 第12号, 18-23, 1981
- 18) 大場一義: 川瀬元九郎の生涯と功業, 体育史探求, 298-313, 岸野雄三教授追官記念論集刊行会, 1982
- 19) 醒夢哲人: 體育とは何ぞや, 體育, 第121号, 8-13, 1903
- 20) 杉浦守邦: 柏学園に関する研究, 日本特殊教育学会発表論文集, 第16回, 342-343, 第17回, 344-345, 第18回, 478-479, 1978-1980
- 21) 砂原茂一: 一人の療法士の軌跡, 理学療法と作業療法, Vol.14, No 3, 202-206, 1980
- 22) Thulin J. G.: Gymnastic Hand-Book, Sydsvenska Gymnastik-Institutet, Lund, 1947
- 23) 宇留野勝彌: 肢体不自由児の父柏倉松蔵さん, (私家版), 1967
- 24) Wheeler R. H., et al: Physical Education for the Handicapped, Lea & Febiger, 1976